大会報告

第8回品質工学技術戦略研究発表大会報告

RQES2015企画委員会

2015年11月20日（金）星陵會舘ホールにおいて第8回品質工学技術戦略研究発表大会を「品質工学の果たすべき役割を探る－ここまで拡大した品質工学－」の大会テーマの下で開催した。大会参加者は151名（会員127，非会員16，招待8）であった。産業技術総合研究所　小池昌義の総合司会で，品質工学会会長　齊藤　潔の開会挨拶のあと，招待講演，研究発表6件，記念講演が行われた。

開催にあたって

2008年に始まった秋の大会も今年で8回目を迎える。田口玄一が「品質工学は技術開発の戦略である。従って個別技術にとらわれない汎用技術である。」としてから，本大会ではこれまでも広い分野のテーマを取り上げて，本質的な議論を行ってきた。

今年はサブタイトルを「ここまで拡大した品質工学」として，大地震の予測，パワーハラスメント判断基準，医療の現状や企業業績診断，リーダーシップの発揮や経営者要求分析など社会科学領域を中心に幅広い分野に品質工学が適用された事例が発表される。適用分野を広げることは，品質工学の発展に欠かせない。新しい研究テーマへのチャレンジを通して，品質工学の本質が見えてくる。そして適用事例が増えることによって，それぞれの領域で品質工学への理解が深まり活用が進む。品質工学が目指す社会の生産性の向上，自由の総和の拡大は，これらのステップを着実に実行することによって現実味をおびてくる。ぜひ参加者が積極的に質問し，議論してくれることを期待している。

（品質工学会会長　齊藤　潔）

【招待講演】

「日本式インダストリー4.0と品質工学―日本流のスマート工場と新しいモノづくり―」

国立研究開発法人産業技術総合研究所理事
安永裕幸

Industrie　4.0が話題となっている。が，誰もその詳しい実像を語っていないように見える。Buzz word たるIndustrie 4.0の真相かもしれない。ある人は言う。「あんなの日本のものづくりでは，とっくにできてますよ。」別の人も応戦する。「とんでもない。メーカが違えばデータが繋がらないなんて，10年後は全部外国製に駆逐されますよ。」多分，真実は中間にある。電波タグを張り付けての少量多品種・混流生産，センサを張り巡らせた工場内データのフィードバック，確かに日本ではできているし，これからも高度化する筈だ。一方で，デファクトにせよデジュールにせよ，特に大手企業は技術も手法も囲い込んで標準化からほど遠い。が，もし日本の技術がなければ，10年後のモノづくりは「データは山ほど飛んできた。が，誰もそのデータで作った製品が求められる品質・スペックを満たしていることを検証・認証できない」となる筈だ。ここに品質工学の出番がある。

Q　ネットワークの統合であると考えている，統合化したものの最適化は品質工学の課題であると考えるその点はどうか？

A　最大の課題は，セキュリティ。流出などが起きた時のルールも考えておくべきである。ネットワークの品質はどう定義するかわからないが，品質工学のテーマになりうる。

Q　品質工学の課題は産業界に食い込んでいくことであるが，どう考えるか？